
誰の所為でもなく

幸村渉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰の所為でもなく

【Zマーク】

Z69210

【作者名】

幸村涉

【あらすじ】

願いは叶うといつけれど、そこに至るには泣けるくらい馬鹿なことをしていたりする。ひとりの女性に恋する健気な男の話です。

誰の所為でもなく1

「わ、私がこれを　？」

俺の手元にある一枚の書類をみて呆然と呟いた。

「昨日」れを書いあと、寝ちゃったあなたを運んで「こへ来たんだ
けど覚えてない？」

「えええっ！？だつて昨日あなたと一緒にいたのは覚えてる　で
も昨日まであまり話したことすらなかつたのに結婚届なんて」

そう、俺の手元にあるのは結婚届。

今こる場所はプリンスホテルのダブルベッドの上。

「「めんなさい。私、酔つて無茶を言つたのね。その届け出は捨て
るから迷惑かけて本当にごめんなさい」

ベッドの上で昨日着ていた服のまま、なぜか正座している彼女はガ
バッヒ土下座して謝つた。

捨てる？とんでもない！

パニクつて「いるせいか結婚届なんものが都合よく手元にある不自
然さをつつけられなくて良かつた。

記憶をとばしたのは睡眠薬を飲ませたからで、届け出もわざと読ま
せず書かせた。

「この苦労を無駄にしてなるものか！」

「無理矢理で結婚届を書くはずない」

自分は書かせておきながら、だが。

「あなたのことは知っていたしこれからも知つたこと思つたんだ」

これは事実。

五年もの毎日を遠くから毎日みていたのだから。

彼女が他の男と仲良く話すところも、口説かれているの口説付かず笑つてゐるところも、この五年間腐るほどみてきたんだよ。

「でも付合つてもいいのむぎゅ」

彼女の口に手を置いて言葉を発するのを遮つた。

「好きなんだ

我ながら今更だと思つ。

でももう待てないんだ。

「結婚届は今すぐにださなくていい。付き合つてくれませんか？」

彼女の細い肩を抱き寄せて温もりを感じると答えもわからぬの安心する。

矛盾だらけだ。

今まで遠くからみていたのにこれは夢じゃないと、現実なんだと思
い知られる。

(俺を)

「俺を好きになつて」

心の声はかすれたように少しづつ心細いものだつた。

それでも胸の中に抱き込まれた彼女に届くのは足りていたらしく。

ビクッとした彼女をみると耳がほんのり赤くなっている。

「どうして私なんか 私なんて駄目だよ」

震える声すらも變おしい。

その声も奪いたいほどなの!。

「美沙子さんじゃなこと黙田」

他の女で我慢できるなら苦労しない。

むじむじと俺をしたのは君なんだから。

「なつなこいつのよーどつこつとみんなこいつてるんで

むじむじ

彼女の口を口で塞ぐ。

(柔らかくて甘い。噛み千切つたら血もあまこのかな)

あまりの気持ちの良さに思わず夢中になっていたらしい。
らしい、というのはキスし終えて満足感に満ちている俺の腕の中でも
彼女がぐつたりしているから。

「あなたにしか言えない。ねえ」「

涙目になつて潤んだ瞳。

不安そうな表情も息を途切れ途切れにするのも全部。

「ねえ美沙子さん、信じてよ。これ以上手だせたくないから

全部俺の前だけにしてほしいんだ。

こんな独占欲があることも知りたくなかつた。

君に逢つまでの俺にどんなに戻りたかったことか。

適当にもててたし遊ぶ女は勝手に寄つてきたし。

なのに君には惨敗で。

情けない自分がみじめだった。

だからや、いろんな俺にした君が責任をとつてよ。

「ウソ。 美沙子さんが好きになるまでしないつて約束するから」

真っ赤になる美沙子さん。

そのとか、でもとか言いながらも必死になつて考えてくれてるのがよく分かつて嬉しくなる。

「その、ええとその　はい。 ようしくおねがいしま、す？」

首をかしげた疑問系の了承だけど俺には充分だった。

五年間指くわえて見てるのに比べれば破格の前進だ。

「駄目　我慢できないかも」

「我慢てなにを　むぎゅ」

数分後。

我慢できずには再びキスして押し倒してしまった美沙子さんに殴られて。

赤くなつた頬を冷やしながら、帰らうとする彼女の服を掴んで帰らせないようにする俺と彼女の攻防戦がはじまつたのだった。

誰の所為でもなく2

鈴木美沙子。

32歳にして結婚を前提に付き合う人ができた。

できてしまったというほうが正しいけど。

佐々木と一晩過ごした前日、職場の飲み会でいつも通り控えめにチューハイをちびちび飲んでいたはずだった。

30歳すぎると急激にアルコールに弱くなつて。

だから余程のことがない限りハメを外さないよつ氣をつけてたんだけどな。

「鈴木さん隣いいかな」

自問自答しながら食堂で日替わりランチを食べていたら、悩みの原因である佐々木浩史が隣に立っていた。

「はあ どうぞ」

クスッと笑い、この間はどうもと話かけてきた。

ホテルで逢つた訳の分からぬ佐々木とは別人のように大人びている。どこぞのブランドで購入したのであるう品のよーストにネク

タイがビシッと決まつている。

田に焼けた肌にほじよく弓を締まつた顔。

あまり関わることがない部署だし、本来穏やかで将来有望な佐々木と付き合いたいと思う女の子たちは沢山いるのに。

(何故私?)

思わず見つめているとわざげなく耳に顔を近づけてきた。

「そんなに困った顔されるとキスしたくなる」

途端にキスされたことを思い出して顔に血が集まるのを感じた。

「からかうなら行きますよ」

「からかってないしー。疑い深いんだから」

ボソッと呟いてるけど聞こえてるからね。

「佐々木さんと接点なかつたじやない。信じろってやうのは無理あるよ」

むしろ何事も石橋を叩いて叩きまくつて渡る生真面目な私に、いかにも遊んでますタイプの彼から結婚前提とか言われても、30過ぎて騙されたら立ち直れないんだからね。

「その件だけ今口にこいてるならデータしちゃ」

「でえと~。」

「お付き合こするならお互いを知らないとな」

本当にしれっと話すよなあ」の入って。

ホテルで迫ってきた彼を知らなかつたら流すけどあの時の彼はなん
ていうか。

「 それも無理?」

不安そぞに尋ねる彼の手がスーツのズボンをぎゅっとこじらへっている。
私相手にあの時も緊張してたのが可愛かつたんだ。

「ひりん行く」

ほら、私のこんな一言で田が輝く。

普段の落ち着いている彼が嘘のよつよつ供ほくみえる瞬間かもしけ
ない。

(たまには当たつて碎けてみてもいいか)

「速攻で仕事終わらせてメールする。」

宣言したあとになにやら意氣込んで立ち去つていった。

なんだらうつあの人。

なんていうか へんなひと。

ものすごく可笑しくなつて一人笑うのを誤魔化すために、お茶を飲むふりをして顔を隠した私がいた。

誰の所為でもなく3

佐々木浩史。29歳。

五年間片思いだった鈴木美沙子さんと念願叶つて付き合いつつになつたのだが。

そんな彼は仕事の合間に頭の中は美沙子さんで埋め尽くされている。

（俺の美沙子さんデータベースによると映画はアクションより恋愛系。サスペンスやホラーは見れない。

いや待てよ。ホラーにして美沙子さんに縋りつかれるのもありだよな。

おっと入力ミス。

浮かれすぎ落ち着け。）

「佐々木くん、今いいかな？」

（いいわけない。初デートの対策練つてるから邪魔すんな）

とはいってもいえるはずもなく、穏やかな表情を一枚自分の顔に貼り付けて振り向くと美沙子さんの同僚の佐伯瑞穂が待つていた。

「どうしました？」

「ええ、ちょっと 席はずせるよね

瑞穂は最後のほう声を抑えて有無を言わせない笑顔で連れ出した。

「佐々木がにやけてるのみて上手くやったのは分かった。でも、どうなったのよ」

興味深々で聞いてくる瑞穂の手には缶ジュークスが握られている。常々瑞穂から美沙子さん情報を流してもらっていたため、缶ジュークスはその情報料である。

「まあは「トーアさん」とになりました」

「ふうん。佐々木のヘタレ真似じや無理かなーと思つたけどやっぱり動いたか」

ヘタレは地味に落ち込むからやめると何度もわせせる気だよ。しかし今日の俺はこつもの俺とは違うのや。

「なんとでも。今日ほどにかく早く仕事片付けたいんですよ

わざわざ仕事に戻らせる。

話している時間が惜しこんだよ。

「あはは分かったわよ。ただ一個だけ言つたくだけ

そして瑞穂はこりこり笑つて続けた。

「あなたは頑張らなくていいからね」

「ガンバラナクテイイ?」

「佐々木はたまにこいつであるかっていろいろ思って詰めてやつすがる
から」

心配なのよねえ、と缶ジュースを手のひらで転がして言った。

「美沙子さんに迷惑かけるような真似は」

「分かってるわよ。そういうやなくて佐々木はそのままでいいからつ
ていいたいだけ。肩に力いれなくていいんだよ」

別に気負つてるつもりもないんだが。

「無自覚なのが佐々木らしいわね」

去り際、瑞穂にまじめにしなかよーと忠告を受けた。

再びテスクについてパソコン入力しながらふと思いついた。

(今日はパンクの服きてたつ。あ、そりだ)

「美沙子さんおまたせ」

待ち合わせ場所に立っている美沙子は携帯を閉じて顔をあげた。

それから俺を見て息を飲み込んだ。

「なに、その、花、たば」

あれから早めに仕事終わらせて速攻で花屋に行き、美沙子さんがきて
いる服に合わせて花を購入した。

花屋の店員にノロケやら細かい注文やら相談をして一時間以上もか
けた代物で。

「美沙子さんはぽいかなーって。」「の//バラとか」

「

美沙子さんはぽかんとしてえ、とかうん、とか言つてゐるけど嬉しそ
うじゃないな。

世の中の女性は花が好きなものだと思つてたけど好きじゃなかつた
のかもしけない。

(美沙子さんはデータが頼りにならないとは)

落ち込みはじめた俺に気付いたのが美沙子さんは慌てて近寄り花束
を受け取ってくれた。

「嫌なわけじゃなくてびっくりしただけ。こんなに花貰つたのはじ
めてだから。すぐ綺麗」

頬を染めて花をみつめる姿はもつと綺麗で。

自分の選択にグッジョブと密かに親指をたてた。

「映画みにい」つか

と、両手で花を抱えて歩き出したのをみて俺は大きな失敗をしたことに気づいてしまった。

（これじゃ手を繋げないじゃないか！）

佐々木が瑞穂に忠告されたことの本来の意味に気がついたのはやつてへるのだろうか。

誰の所為でもなく4

「……加減にしなさい」

私は隣にいる男についてにキレた。

せき合ひのひと半円。

この男は金銭感覚がおかしい。

おかしくなるのは私に限つてのことだと言つて張つてゐるヤジ。

田の前には某高級ブランデのネックレスと指輪。総額うん十万円。

ワインとウショウ・ペッソングのつまみで、いいなー綺麗ねーつて言つただけなのに彼は本気で買おうとしていた。

「だつて美沙子さんに似合ひやつなんだもん」

ギロリと睨むと慌てて口を噤んだ。

「だからて貰ぐようなことしないで。本気で欲しいなら自分で買わよー!」

「俺が買つてあげたいだけなのに」黙れといつかわりに両方の頬を思いつきつつねる。

「ひやい痛いといひやがけど……加減やめてほしー。

庶民の私には心臓がバクバクして刺激が強すぎた。

初デートの日なんてドラマでもみかけないくらいのピンクの薔薇をメインにしたやけにでかくて重い花束を渡してきた。

それからケーキが食べたいといえば棚の端から端まで大量に。

携帯が壊れたといえばお揃いの最新機種を。

少し思い出すだけでも恐ろしい。

友人の佐伯瑞穂に話すと爆笑されるけど、笑い事の域を越えてるから。

「み、美沙子さん 怒つてる？」

身長一八〇センチ超えた彼なのに落ちこむ姿が犬にしかみえない。

しつぽがきゅうんって縮こまってる。

「」あん。でも俺、美沙子さんが喜ぶのがみたいで

もう充分喜んでる。

一緒にこいつしているだけで満たされていふことがどうして伝わらないんだろう。

「私が一番欲しかったもの何だかわかる？」

彼にはわかるだろうか。

私がずっと手に入れたくて仕方なかつたものが。

「じゃあ佐々木くんが一番ほしいものって何? 買つてあげるから教えて」

彼は真剣な表情で考えていたけどしばらくして目を見開いた。

「美沙子さんがほしかつた。他にいらない」

いつも彼の言葉は直球で。

そのたびに泣きたくなるのをあなたは知っているんだろうか。

不安なとき人に人の温かさを感じると安心するから。

ただ感じたくてそつと佐々木を抱き寄せる。

「ずっとそばにいてくれる人がほしかつたの」

いつか見つけられるだろ? か。

もしかしたら誰かみつけてくれないかなつて。

他力本願して気付いたら30オースチャつたけど。

「私のこと好きになつてくれてありがとう。私も佐々木くんのこと好きだよ」

そのときの佐々木の顔つたらなかつた。

一瞬泣きわうになつて、真つ赤になつてつた。

やつぱりこの人つてなんていうか 可愛い。

最初は自分と全く違うタイプの人だから苦手だったのに。

印象なんて当てにならないものなんだ。

「覚えてる？ 最初の約束」

ふと佐々木が尋ねてきた。

赤くなつたまんまの耳が氣になるけど表情は真摯で。

「俺のこと好きになるまでは手はださないってやつ。そ、行こうか」

手をぐいぐいひつぱつてタクシーの中にポイッと連れ込まれた。

「プリンスホテルまで」

全然わかつてない。

なんだつてこつも感覚がずれてるのかな。

そして。

タクシーの中で行き先をあーでもないこーでもないと揉めて運転手に放り出された私たちだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6921o/>

誰の所為でもなく

2011年11月11日08時56分発行